０９／０７／１２　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：自由と向き合う１
聖書箇所：ローマ人への手紙　６章１５－２３節

「あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」と、パウロは１４節でこのように教えました。救われた者たちは律法の力、律法の支配下にあるのではなく、そこから救い出されて、恵みの力の下、恵みの支配下にあると教えたのです。同時に、「人間はそのどちらかの支配下に置かれている」ということを１４節で教えました。その教えを聞いたある人たちは反対します。そして、パウロは６章の１節と同じように、１６節からその反論に答えて行くのです。６：１では「罪が赦されることによって神のすばらしさが明らかにされるのなら、もっと罪を犯すべきだ。罪を犯すことによって、私たちは神のすばらしさを証する機会を神に提供することになるのだから。そのように教えるなら、みな、このように考えてそのように生きるから。」と人々はパウロの教えを非難しました。それに対して、パウロは**「絶対にそんなことはありません。」**と言います。

第二の反論はここに記されていたように「恵みの下にあるのだから罪を犯そう」というものでした。１５節**「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。」**、これがパウロの教えに反対する人たちの反論でした。「我々は恵みの下にいるのだから、どのように生きてもいいではないか！」と。ある人たちはこれまで自分の行動に制限を加えて来た律法から解放されたのだから、自由に生きてもいいのではないかと言います。実際に、このような考え方はどの時代にも教会の中に存在しています。ある人たちは今の時代にあっても「もう自由なのだから何をしても構わないでしょう」、「もう我々は救われたのだから、罪の赦しをいただいたのだから、残った人生は自分の好きなように生きてもいいではないか、何をしても赦していただけるのだから、罪を犯してもいいではないか、どうせ栄光のからだをいただくまで罪を犯し続けるのだから、仕方ないではないか。」と。「この様に生きなさいと命じたり、また、教えることは、その人を今一度律法主義に引き戻すことになる。だから、自由に生きればいいのだ。私たちはそのように教えるべきだ。」と。「自由に生きなさい、好きなように生きなさい。そして、罪を犯せば神に赦しを求めたらいいのだ。」と言います。このような考え方が正しくないことは明らかです。なぜなら、罪を犯すことを選択しているのはあくまでもその人自身だからです。自分が罪を犯そうとしているのです。そして、人間は面白いもので、そのように罪ある生活をしたいと思うと、それを正当化する方法を考えます。私たちは罪深い者だから、罪を止めることができないから罪の中を歩んでも仕方ない、でも、感謝なことに、神は赦してくれるからその都度告白すればいいのだと言います。

無律法主義ということばを最初に使ったのは、宗教改革を行なったルターでした。彼は友人のヨハン・アゴリコラが「キリスト者は律法から全く自由にされたのだ。モーセによって記された道徳律法から自由にされたのだ。」と教え始めたことを聞いて、ルターは彼のことを「無律法主義者である」と呼んだのです。律法から自由にされたのだから、どのように生きても構わない、道徳律法など私たちには無縁のものだ。私たちは自由だから好きに生きても構わないと言います。宗教改革で言われたことの一つは「善行は善人を生み出すものではない。しかし、善人は善行を生み出す。」でした。これが私たちの信仰です。私たちがどんなにすばらしい働きをしても、ボランティア活動に参加して人々に助けの手を差し伸べても、また、心を入れ替えて一生懸命聖書の教えを守ろうとしても、そのような行ないが私たちを救うことはできません。私たちを罪から救うことはありません。私たち罪人は神の恵みによって救われるのです。しかし、神が本当にその人を救ってくれたなら、その人のうちには変化が生まれて来ます。正しいこと、神が喜ばれることをして行こうとします。そのような者に生まれ変わるのです。

ですから、パウロはこのような考え方をしている人たち、このようなことを教えている人たちに対してこのように答えました。１５節の最後に**「絶対にそんなことはありません。」**と。そのような考え、そのような教えは間違っているとパウロは否定するのです。律法から解放され恵みの下にあるということは、勝手気ままに生きることではない、自分の好きなように自由に生きることではないと、パウロは教えるのです。律法から解放され自由にされた者、救われた者、恵みの下にある人は創造の目的に沿って生きようとする者です。罪は神のみこころから神のご計画から外れることです。だから、救われた者たちはこれまでと同じようにではなく、今度は神のみこころにご計画に従って生きて行きたいと願うはずです。パウロが言うことは、このようなとんでもない考えをもっている人たちは、神の恵み、救い、また、自由についてまったく分かっていない人たちだということです。エミル・ブルーナーというスイスの神学者は「律法からの解放とは神からの解放という意味ではなく、神に対する解放である。」と言っています。

よく考えてみてください。私たちは神のために生きる者として生まれ変わったのです。本来の目的である神のみこころに沿って生きる者として生まれ変わったのです。罪の束縛から解放されて自由にされたのです。この救いがどういうものであるかということを私たちはしっかり覚えておかなければいけません。そのことをパウロはこれから私たちに教えてくれるのです。

☆なぜ、罪赦されて自由にされた者が、再び罪の道を選択することが間違っているのか？

救われた者が今一度罪に舞い戻って、罪の中を歩もうとすることがなぜ間違っているのか、その理由をパウロは二つのことをもって教えています。

Ａ．奴隷だから

奴隷だから、あなたは再び以前の生き方に戻ることはできないとパウロは教えようとします。罪赦されて自由とされた者が、再び罪の道を歩むことは間違っていると言います。第一の質問に対してパウロはバブテスマの説明によって答えました。今見ている第二の質問に関してパウロは、「奴隷」のたとえをもって説明しようとしています。なぜ、「奴隷」というたとえを用いたのでしょう？それは、この当時の読者たちには非常に良く分かるたとえだったからです。パウロの言いたいことが、「奴隷」のたとえを使うならよく分かるということで、パウロは話を続けるのです。

１．奴隷の務め　　１６ａ節

まず、私たちが知らなければいけないことは「奴隷の務め」が何かということです。それは一言で言うなら、「ひとりの主人に仕えること」です。１６節**「あなたがたはこのことを知らないのですか。」**と、パウロがこのように言ったのは、このことはまったく新しい教えではなくて、もうすでに読者たちが知っていることを想定しているからです。**「あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、」**と言っています。「自分自身をだれかにささげて服従して生きる」と。パウロがこのように記したのは、奴隷の中に自発的に奴隷になった者がいたからです。１６節を見ると、自分から進んで奴隷になったことが記されています。**「あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、」**と、このような選択をした人のことです。現実にこのような奴隷がいたのです。余りの貧しさの中で、自発的に、生活の糧を得るために奴隷になった人たちがいたのです。そして、パウロはそのことを知っていたのです。だから、１６節の初めにそのことを言うのです。そして、その上で、私たち今の読者が知っておかなければいけないことは、奴隷は私たちのような自由はないということです。バークレーはこのように説明しています。「奴隷には自由がない。ゆえに、自分の時間などあるはずがない。彼は主人の独占的な所有物でしかなかった。自分の好きなことをすることなど赦されていなかった。ただ、忠実に自分の主人に服従することしかなかった。」と。パウロが「奴隷」というたとえを用いて教えたかったことは、「本当のクリスチャンは唯一の主である神にだけ仕える者になったのだ」ということです。あなたには一人の主人しかいないのだ、あなたは新しい主人をいただいたのだと。その当時の奴隷たちがそうであったように、主人は一人だと言うのです。だから、救われた者が罪を犯そうと考えることは、解放されたかつての主人に再び従う者になることなので、これは大きな罪であるとパウロは教えるのです。

初めに覚えておきましょう。奴隷は一人の主人に仕える者です。二人の主人に従う者ではなかったのです。その上で、パウロは二種類の奴隷がいることを教えます。

２．奴隷の種類　　１６ｂ節

（１）二種類の奴隷

１６節の後半、**「あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」**と、二種類の奴隷が記されています。パウロは、実際にその当時存在していた奴隷のことから、今度は話を全人類の方に向けます。パウロが言うのは、すべての人間はこのどちらかに属するということです。みな奴隷であって、二つに分けることができる、**「罪の奴隷」**か**「従順の奴隷」**かのどちらかだと。それでいて、この二人の主人に同時に仕えることはできないと言います。イエスがマタイ６：２４でそのように言われましたから、私たちはそのことを覚えなければいけません。**「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」**、罪に従うか従順に従うか、そのどちらかだと言います。この１６節で対比されている二種類の奴隷、**「罪の奴隷」**と**「従順の奴隷」**、言い方を変えるなら、神に逆らう者か神に従う者かと言っているのです。なぜなら、罪に従う者というのは神に逆らう者です。つまり、神に背いているのです。従順な者とは神に対して従順なのです。ですから、神に対して不従順な者と従順な者、この二種類がいるとパウロは言うのです。そして、１７節を見ると**「…、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、」**とあります。私たちはみな、生まれながらに罪の奴隷、神に逆らう者であったとパウロは教えているのです。

（２）二種類の奴隷の行き先

もう一つ、この１６節で見ておきたいことは、この二種類の奴隷の行き先です。行き先が違います。**「罪**

の奴隷」は**「死」**であり、**「従順の奴隷」**は**「義」**であると言います。**「罪の奴隷となって死に至り」**と書かれていますが、この「死」がどういうものか皆さんはよくご存じでしょう。これは肉体の死だけを指しているのではないことは明らかです。なぜなら、この後、２３節を見ると**「罪から来る報酬は死です。」**と**「死」**ということばが出て来ますが、**「しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」**と**「いのち」**ということばが記されているからです。**「死」**が**「永遠のいのち」**と対比されているのです。ある人たちは**「永遠のいのち」**をいただくが、ある人たちは**「死」**をいただくと。そして、この**「死」**も永遠に続くものです。黙示録の中のことばを使うなら、**「第二の死」**です。**「罪の奴隷」**たちは肉体の死を経験するだけでなく、永遠に神から引き離されて、永遠に神ののろいのもとに、永遠に神のさばきである苦しみの中で過ごすのです。

それに変わって、**「従順の奴隷」**はどうなるのでしょう？パウロはここで**「従順の奴隷となって義に至る」**と記しています。なぜ、「従順の奴隷となっていのちに至る」と言わなかったのでしょう？パウロは敢えて、目的をもって**「義」**ということばを使っているのです。もうすでに、私たちは繰り返してこのことを学んで来ましたが、イエス・キリストを信じる者を神は「義と認めて」くださる、これは法廷の用語であると学びました。裁判所で裁判官が被告に対して「この人は無罪である」と宣告する、これが「義と認められる」ということです。そうでない人は「有罪と認められる」人です。「無罪」か「有罪」かです。「義と認められる」ということは、罪人が神の前にあって「無罪」と宣告されることです。

この**「義」**ということばを辞典で調べると、「規範に従う」という意味が含まれています。そして、聖書記者は「規範とは神ご自身の性質のことである」と言います。つまり、パウロがここで敢えてこの**「義」**ということばを使ったのは、救われた人がどのような人であるかということを明確にしているのです。**「義」**は「規範に従う」、つまり、神のご性質に従うこと、ゆえに、「義とされた人」は「神のご性質に従う者」なのです。だから、救われた者たちは生き方が変わって行くのです。救われた者たちは神のご性質に倣って、主ご自身に似た者へと変えられて行くのです。そのような働きが始まったのです。このことを私たちは難しいことばですが「聖化」と呼んでいます。救われた者たちがイエス・キリストに似た者へと変えられて行く、その過程のことです。私たちはこの地上にあって、神によってそのように変えられて続けて行くのです。なぜでしょう？それはその人が「義とされた」からです。神があなたを「義」としてくださった、ゆえに、あなたは神のご性質に倣って、それに似た者へと変えられて行くのです。そのプロセスが始まったのです。ですから、パウロは誤解しないように、しっかりと救いのすばらしさがどのようなものかを話しています。なぜでしょう？思い出してください。反対者は何と言いましたか？「救われているから罪を犯しても構わない」と、パウロは「違う！本当に神が救ったならその人は罪から離れる者になる。」と言います。なぜなら、神のご性質に似る者として変えられて行くからです。もちろん、何度も学んでいるように、罪を犯さない完全な人間になるわけではありません。そのことはこの後、パウロが教えています。イエス・キリストによって救われた者たちは、かつての生き方から離れて神が喜んでくださる生き方へと変わったのです。生まれ変わったのです。それが救われた者たちです。

しかも、この**「義」**ということばはこの地上のことだけではありません。終末に関連することでもあるのです。ガラテヤ５：５に**「私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。」**とあります。**「義をいただく」**ということです。もう義とされた私たちが、**「義をいただく」**ことを熱心に待っているということです。つまり、私たちが罪のからだから解放されて栄光のからだをいただく、そのときのことです。ですから、パウロがここで**「従順の奴隷となって義に至る」**と言ったのは、救われた者たちは生まれ変わり、神に似る者としての生活が始まり、そして、究極的にその人は栄光をからだをいただく、そのすべての過程が始まったということです。だから、これまでのような生き方を喜んで自分から進んで行なって行くことはおかしいと言うのです。

神の恵みによって救われた奴隷たちは、その当時の奴隷たちと同じような特徴をもっています。それは「従順」です。主人に服従することです。そして、そのように神に従う人たちを神が造られた、それが救いなのです。ローマ書を振り返って見ましょう。１：５にこのように書かれています。**「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」**、パウロたちは神から特別な働きをいただいた、彼らは出て行って**「あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらす」**と、言い方を変えるなら、これは救われる人のことです。救われた人はパウロのことばによるなら、**「信仰の従順」**が特徴だと言います。神に従って行こうとする人たちです。どちらの主人に従っているのかはことばではなくその人の生き方が明らかにします。パウロはこの６章で、罪の奴隷として歩んでいるか、神に従順に歩んでいるか、それはその人の生き方であると、だから、あなたの主人がだれであるかは、あなたの生き方が明らかにする、あなたがだれの奴隷であるのかはあなたの生き方が明らかにすると言うのです。トーマス・スクレイナーという神学者は「救われている人、救われていない人の特徴はその生き方に現われる」と言っています。

イエスがヨハネの福音書３：１９で**「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。」**と言われました。生き方が現わされています。**「光が世に来ているのに」**、神が来ているのに、救いが来ているのに、人々はその救いを受け入れることよりも、自分の罪の中を歩み続けようとする、２０節には**「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」**と書かれています。それが彼らの生き方なのです。救いに対して、神に対して拒み続け、自分の思い通りに好きなように罪の中を歩み続けていると言います。ローマ書１章にもこのように記されています。１：２１**「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」**と、神の方に来ない人々、神に逆らい続ける人々は、いつまで経ってもこの真の神を神として崇めようとしないし、その方に感謝もしないのです。そのような生き方に、彼らがだれの奴隷なのかが明らかにされるのです。また、ヨハネ５：３９－４０には**「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。:40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」**とあります。あなたがたはわたしを信じようとしない、その生き方がその人たちの特徴なのです。だから、パウロが言うことは「だれがあなたの主人であるのかは、あなたの生き方を見れば分かる」ということです。あなたがどのようなことを愛して、どのようなことのために生きているのかです。先ほどのトーマス・スクレイナーは「もし、だれかが恵みの下にいると主張し、それでいてなおも罪の奴隷として生きるなら、その主張はその人の行ないによって無にされる。恵みの下に生きる人々は、恵みの下にいることを明らかにする、なぜなら、彼らの主人は新しくなったからである。そして、かつての古い主人、罪から解放されたからである。恵みはただ単に罪の赦しが含まれているのではない。そこには罪の支配と主権を打ち破った力が含まれている。」と言います。全くそうだと思いませんか？「恵み」というのはただ罪が赦されただけではないのです。そこには「罪の支配と主権を打ち破った力がある、だから、救われた者は生まれ変わった者としても新しい生き方をするのです。神の恵みによって救われた者たちは、これまでの生き方から離れて、神が喜んでくださる本来のあるべき生き方を始めて行くのです。恵みにはそれだけの力があるのです。生まれ変わらせる力です。パウロが言うことは、あなたはかつては罪の奴隷だった、しかし、あなたは神の奴隷、従順の奴隷として生まれ変わった、そのあなたがなおもかつての主人に仕えることなど不可能なことだということです。奴隷は一人の主人に仕える者だからです。いつまでも罪に対して白旗をあげるようなそんな弱い者として神はあなたを救ったのではありません。死に対して、罪に対して勝利されたその主なる神の側に立つ者として私たちは生きて行くのです。悲しいことに、罪に敗北することもありますが、私たちはいつまでも負けていません。神の力をいただきながら、助けをいただきながら歩むことによって、私たちはこの難攻不落だった敵に対して勝利する者へと変わったのです。私たちは勝利者として生きることができるのです。そのように私たちは生まれ変わったのです。

Ｂ．神の奴隷だから　　１７－１８節

なぜ、私たちはかつての罪の生活に戻らないのか、二つ目の理由を見ましょう。私たちは神の奴隷だからです。ただ奴隷だけでない、あなたは神の奴隷だからこれまでのような生き方はできないと言うのです。パウロは救われた者たちに「あなたはもう救われたのに、どうして再びあなた自身を罪にささげて奴隷として生きようとするのですか？そのような選択は間違っている。」と言うのです。そして、この後、救いについて教えを為して行きます。

１．救いを得る方法　　１７節

（1）心からの服従　―　**「伝えられた教えの基準に」**

パウロは１７節から「救いを得る方法」を教えています。１７節**「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、」**、まさにこれがパウロが語っている救いのメッセージです。伝えられたメッセージです。この**「教え」**とは福音のメッセージです。パウロは面白い書き方をしています。**「伝えられた」**、あなたがたのところに届いて来た**「教えの基準に」**と言っています。なぜ、パウロは「伝えられた福音のメッセージに」と書かなかったのでしょう？**「基準」**ということば、これは「像、彫像、」でその形に似せて作られたものです。つまり、パウロは敢えてこのようなことばを使うことによって、自分が語っているメッセージとこれまで信仰の勇者たちが語った福音のメッセージとは全く違いがないということを言っているのです。なぜなら、人々はパウロのメッセージに疑問を抱いたからです。パウロのメッセージは間違ったメッセージ、異なった福音であると思ったからです。だから、パウロはそれを否定するためにそのように言ったのです。彼のメッセージの正当性を明らかにしたのです。パウロはこのことに関して、ガラテヤ人への手紙１章でこのように教えています。１：７－９**「ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。:8 しかし、私たちであろうと、天の御使いであ**

ろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。:9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。」、パウロは福音のメッセージを軽率に受け取っていません。この後、１１－１２節で**「兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。:12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」**と言っています。つまり、パウロは「私が語っているメッセージは神から直接いただいたものだ。」と言うのです。この時代はそうでした。まだ、新約聖書は完成していなかったからです。神は特別に働いてそのようなわざを為したのです。だから、パウロはそのメッセージを正確に語らなければならないという大きな使命を持っていたのです。それゆえに、もしだれかが、この大切な福音のメッセージを間違って語るなら、その者はのろわれるべきだと言うのです。パウロはメッセージの大切さをよく分かっていました。神のメッセージであるゆえに、それを正確に妥協することなく伝え続けたのです。

ですから、**「伝えられた教えの規準に心から服従し、」**と言ったのです。あなたがたが聞いたメッセージと私が語ったメッセージは同じである。そして、あなたがたはそのメッセージを聞いたとき**「心から服従した」**と言います。パウロはここにだけこのような表現を使っています。考えなければいけないことは、ローマの人々がこの福音のメッセージをどのように受け入れたかです。彼らは**「心から服従した」**のです。彼らはただの感情だけで受け入れたのではありません。また、知的に理解したのでもありません。彼らはしっかりと理解して、心からの決心に至っているのです。心の底から「私はこの福音のメッセージに従って行こう」と決心しているのです。イエス・キリストは真の神であり、私たちを救った唯一の神である、だから、その神を信じて従って行こう、このイエス・キリストが私たちの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださった、そして、よみがえられた唯一の救い主である、私はこの方を心から受け入れて従って行こう、この方が神であるゆえに、この方が救い主であるゆえに、この方を自らの主として喜んで従って行こうと、彼らはその選択をしたのです。パウロはそのことを言っているのです。彼らはそのメッセージを真剣に心から受け入れたのです。先にも言ったトーマス・スクレイナーは「『服従』は主に従う決心を強調し、『心から』は従順の深さを表わしている。」と言います。彼らは決心したのです。イエス・キリストを信じて従うということが、どのような人生を自分にもたらすのか分からない、大変な迫害を経験するかもしれない、大変な困難に会うかもしれない、しかし、これは正しいことである、この方が神ゆえに、この方だけが救い主であるゆえに、私はこの方を信じて従って行く、たとえ、どのような犠牲が伴ってもと、そのことをパウロは知ってここで表わしているのです。

２．その結果　　１８節

１８節**「罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」**。**「罪の奴隷」**と**「義の奴隷」**が対比されています。１７節にあったように**「もとは罪の奴隷でしたが、」**、そこから解放されて**「義の奴隷」**となった。主イエス・キリストにある者はみな生まれ変わったのです。私たちはもう罪の支配下にはないのです。罪が私たちの主人ではなくなったのです。神が私たちの主人です。その方に従って歩む人生が始まったのです。

１７節からパウロは救いのことを話していますが、１８節でパウロはこの救いのメッセージを**「教えの基準」**と言いましたが、それを心から受け入れたことによってあなたがたは救われた、**「罪の奴隷」**であった者が**「義の奴隷」**へと生まれ変わったと言いました。パウロはこの救いに関して、神にだけ感謝をささげています。**「罪から解放<u>されて</u>、義の奴隷と<u>なった</u>…」**はどちらも受け身です。ゆえに、１７節の初めに**「神に感謝すべきことには、」**と記されているのです。パウロは分かっていたのです。「救い」は１００％神のわざであることを。神が罪人のかしらである私を救ってくれた、罪の奴隷として永遠の滅びに向かっていた私を救い出してくれたのは、私の努力ではない、神の恵みだと言います。このように聞いた教えに対して、心から服従しようという決心さえも神の恵みだと。

皆さんも思い出してください。イエス・キリストを信じている皆さんは、何度も福音を聞かれたかもしれません。何度聞いてもその意味が分からなかった、しかし、あるときに神はあなたの心に働かれてその救いのメッセージがあなたに対する祝福のメッセージであると気付きました。感謝の心があふれました。また、自分の罪の醜さに心が砕かれました。「神さま、私は罪人です。私は自分で自分を救えません。私のような者のために救いを備えてくださったことを感謝します。私はあなたを信じて従って行きます。」と、そのような決心に至ったのは、神があなたに働いてくれたからです。そのことを知っていたパウロは、だから、このようなすばらしいローマの人たちの救いを覚えてそのことを誉め称えているのですが、誉め称えるその対象を間違っていません。ローマの人たちではなく、救いをもたらした神を称えているのです。

クリスチャンの皆さん、今、あなたが救いを喜んでいるのは、神の一方的な恵みによるのです。神があなたを救いへと入れてくださった、神が理解力をくださった、神があなたの心を開いてくださった、

神があなたに決心を与えてくださった、神がイエスのもとに出て行ってイエス・キリストを信じて従って行こうという決心に至らせてくださった、だから、私たちは神に感謝するのです。パウロは言います。このように神によって一方的に愛されて救いに至ったあなたが、神だけに仕える者へと生まれ変わったあなたが、なぜ、かつての主人に仕えようとするのか、私たちの主であるイエス・キリストを苦しめ悲しめた罪にどうしてあなたは戻ろうとするのか、クリスチャンよ、覚えなさい。あなたは一人の主人に仕える者、あなたは神だけに仕える者と生まれ変わった、あなたは神の奴隷なのだと、このことをもって、パウロは反論に対して、それがいかに間違っているかを明らかにしました。

このことを話した後パウロは、それでいながら、私たちは気をつけていなければいけないと言います。というのは、私たちはこのことを分かっているのに、悲しいことに、罪に敗北することが多々あるからです。ですから、パウロは１９－２３節で私たちに勧めを為すのです。どうすれば罪に負けないで勝利することができるのか、そのことを私たちは次回、みことばから学びます。信仰者の皆さん、神の奴隷とされたことを覚えて、そのことを感謝することです。罪の力、支配から解放されて、神の支配下に、神の力のもとに置かれていることを感謝することです。今日、賛美したように、あなたは勝利者です。勝利者として生きることです。勝利を与えてくださった唯一の神を証するために生きることです。それが救いをくださった神に相応しい生き方だと思いませんか？あなたの主人は一人です。あなたの主人はこのイエス・キリストだけです。